

王子様のおもちや。

K a e d e & R y u n o s u k e

橘 志摩

Shima Tachibana



エタニティ文庫

目次

王子様のおもちや。

5

王子様の花嫁。

295

書き下ろし番外編

王子の姫に愛を込めて。

319

王子様のおもちや。

1 運命の日

——それはまるで、マンガのような出会いだった。

駅に向かつて猛ダッシュしていた私は、ちらりと腕時計に目をやった。時刻は午前十時を回ったくらいだ。

麻生楓、二十六歳、ただ今絶賛再就職活動中。

今日も面接に向かう為、私は急いでいた。けれど次の瞬間、ドンッと身体に衝撃が走り、豪快に尻もちをつく。

そのとき、口をついて出た声は「うあっ！」というもの。

残念ながら、とっさに「きゃあー」なんて可愛らしい悲鳴を上げられるような性格じゃない。

「いたた」と声を漏らしながら立ち上がろうとすると、すっと目の前に手を差し出された。思わずその手を凝視する。

「——すみません、俺、前をよく見てなくて……。大丈夫ですか？」

見上げるとそこにはガタイがよくてかっこいい、爽やかなお兄さんが立っていた。困っているような、戸惑っているような彼の表情に一瞬見惚れる。

「……あ、はい……」

とっさのことで、間抜けな返事しかできなかった。彼はそんな私の手をぐっと引いて、立ち上がらせてくれた。力強く、男らしい手だった。それから彼は、私の服についた砂埃を優しくはたいてくれる。

「怪我はない？」

「あ、……はい、大丈夫です……」

「そう、よかった。本当にすみませんでした」

「いえ……こちらも急いでいて、前方不注意でしたので気にしないでください」

そんな彼の様子にも私も心苦しくなった。

が、次の瞬間、腕時計が目に入った私はそんな気分も吹き飛んだ。全身の血の気が引いていく。

どうしよう、急がないと面接に間に合わなくなる！

「ごっ、ごめんなさい！ 私もう行かなきゃ!! 本当にすみませんでした!!」

「え、あ……!」

次の電車に乗り遅れたらヤバイ!

私は彼のことを気にしつつも走り出した。

低めではあるけれど、今日はヒールのあるパンプスを履いている。だからそんなに速くは走れない、つまりなおのこと時間に余裕がないってことだ。私のこれからの人生がかかっている今日、なんとしても遅れる訳にはいかない。

再就職を切望する私に、やっと訪れた最終面接。

逃してたまるか安定企業!

化粧が崩れるのかもまわらず、汗だくになりながら、なんとか私は電車に滑^すり込んだ。

「——七番、麻生楓と申します。本日はよろしくお願い致します」

斜め四十五度、完璧な角度で一礼してから椅子に腰を下ろした。

居並ぶ重役の前にして、緊張が走る。笑顔は少し引きつっているかもしれないが、それは仕方ないと思ってください。

それからいくつか質問をされ、私は言葉を選びながら答えていく。

前職は総務経理だったから、この会社での希望職種も総務や経理だと伝えた。

この年でフリーターなどとしていられないと、アルバイトをしながら就職活動に励むこ

と半年、初めてたどり着いた最終面接なのだ。どうしても決めたい。ようやく手にした大チャンスをおのずと緊張が高まっていく。

実際就職難とは聞いていたけれど、まさかこんなに就活が長引くなんて思わなかった。前職では、ずっと総務経理を担当していた。大学卒業から三年間みっちり働いてきたから、それなりにキャリアもあるつもりだし、資格だってもっている。

前職をやめた原因が「アレ」だけれど、人間関係だつてうまく築ける性分だと思う。自分ではそう思っていたけれど、私の就職活動はかなり難航していた。次々届く不採用通知に、就活を始めた当初はへこんでばかりいた。

働くなどか、働いても使えないとか、そう言われているような気がしてしかたなかった。でもあるときから、落ちて当然、受かったら奇跡と開き直った。そう開き直ったらチャンスが舞い込んできたのだ。

この会社の一次面接の合格通知をもらったときは、飛び上がるほど驚いた。

それからトントン拍子に進み、とうとう最終面接までこぎつけた。ここまでくれば、どうしたって期待してしまう。

どうか、どうか、うまくここを切り抜けて、再就職できますように!

「——はい。では、こちらからの質問は以上です。麻生さんから質問はありますか?」

「はい、あの」

そう口を開いたとき、突然ドアが開いて、目の前に座っていた重役達が慌てたように立ち上がった。

「……?」

「——ああ、申し訳ありません、遅れて」

「社長！」

社長!?

耳に入った言葉に、私も焦って立ち上がり、礼をする。

不測の事態に、適切な礼の角度など頭からすつとんだ。

っていうか、社長って!

居並ぶ面接官の真ん中に座ってる人が社長かと思っていた。それがまさかの遅れて登場とは思ってもいなかった。違ったんかい!

心の中は冷や汗だらだらだったが、必死で笑みを浮かべながら、顔を上げて——身体が固まった。

「はじめまして、代表取締役社長の片倉龍之介と申します。どうぞ、腰を下ろしてください」

穏やかな優しい声だった。普段の私なら、少しは胸をときめかせていたかもしれないが、今はそんなことを思っている余裕はない。驚きのあまり、いまだ身体は動かないけ

れど、頭だけは妙に冷え冷えとしていいる。私は心の中で叫んだ。

はじめましてじゃない!

そこにいたのは、先程車で思い切りぶつかった人だった。

「はあ……」

散々な最終面接を終え、その夜も私は深夜のファミレスでアルバイトをしていた。

ざわつく店内でついたため息はすぐにかき消されると思ったけれど、思いのほか大きく響いてしまい、アルバイト仲間へ声をかけられた。

「どうしたんですか、楓さん」

「ああ、うん、いや、なんでもない……」

ごまかすように笑みを浮かべると、大学生の彼女は不思議そうな顔をして仕事に戻っていく。

その後ろ姿を見送ってから、再び零れそうになったため息を押し殺して顔を上げた。

生活費の為と思って、このアルバイト以外にも掛け持ちしている。再就職活動をしなから複数のアルバイトをするのは、やはりこの年では体力的に無謀だったかもしれない。早くこんな生活から解放されたい。

そう思うけれど、ふと頭をよぎるのは、今日の面接先の社長の顔。就職への道のりは

遠いと肩を落とす。

せっかく最終面接までこぎつけたのに、最後にあんなオチが待っているなんて思わなかった。いくらなんでも前方不注意で社長にぶつかった女なんて採用しないだろう。どうして私は、こんなについてないのだろう。

大体、今私が必要な生活を強いられているのも、全て前職をやめる原因になったあいつのせいだ。

頭に浮かんだあいつの顔を今すぐ殴ってやりたい衝動に駆られ、顔が歪む。

ああもう、仕事に専念しよう。

私は気を取り直し、接客用の笑顔を作った。

あの会社の最終面接を受けた数週間後。今日も一人暮らしのアパートにやっとこさ帰り着いて、真つ暗な部屋に明かりを灯す。冷え切った部屋は、へこんだ気持ちを更に倍増させる。

こんな風にマイナス思考のループにはまってしまふのは、再就職先がなかなか決まらず、自分に自信がなくなっているせいなんだろうか。

会社勤めをしていた頃は、家に帰った後、友人と電話で「今日会社でさー」なんて愚痴る余裕もあったのに。今の生活のなんとさびしいことか。

とはいえ、OL時代のような生活を今は送れない。

むやみやたらに電話をして、通話料金を必要以上にかける気にはならないし、そもそもこんな時間に友人は起きていない。

はあ、と何度目になるかわからないため息をついて、すっかりくたびれたクッションに腰を下ろし、郵便物を確認していく。すると先日面接を受けた例の会社の名前が目に入り、胸がドキリと高鳴った。だめとはわかっていても、期待する気持ちがあることは否定できない。だが、すぐに思い直した。

いやいや、どうせ不採用通知だった。期待したところで無意味だった。

面接に遅刻しそうになって、スーツ姿で全力疾走したところを、あろうことか社長に見られている。

時間に余裕をもって行動しない人間を、果たして一人前の社会人として認めるか。

考えれば考えるほど、虚しくなってくる。

封書にはさみを入れつつ、ため息をついた。

それにしても、随分と若い社長だったなあ。

私よりは年上だろうけれど、でもいいとこ三十手前にしか見えなかった。

あれなら、面接をしていた重役の方がよっぽど社長っぽかったよ。

封筒から出した白い紙をぺらっと開きつつ、ふんわりと笑ったその人の顔を思い出

した。

ちよつとかつこよかつたよなあ。私が転んだときだって、優しく起こしてくれたし。あんな人が社長なら、女性社員達にとつては夢のような職場なんだろうなあ。そんなことを考えながら、白い紙の文字を目で追う。

「……ええ……」

——株式会社MAPLEの面接にお越し頂きまして、誠にありがとうございました。厳正なる選考の結果、貴殿の採用が内定致しましたので、謹んでお知らせ致します。つきましては、一週間以内に下記連絡先までお電話をお願い致します——

「……えええええ!!」

まさに奇跡としか言いようがない。私は真夜中だというのに大声を上げていた。

2 配属

私は翌朝、MAPLEに電話をかけ、ぜひ入社したい旨を伝えた。すると、三日後、会社に来てほしいと言われ、ドキドキと胸の音を響かせつつ、その三日後ビルのドアをくぐった。

「麻生さんの配属部署は営業第一部ですね。上司の村松むらまつが待っていますから、部署へどうぞ」

なにがどうしてこうなった。私の希望職種は総務経理でしたよね!?

必死の形相ぎやうそうで人事部の人を問い詰めても、にっこりと微笑まれただけだった。

営業職なんて、私、経験ないんですけど!!

おどおどしながら、営業第一部に向かったが、部署名のプレートが掲げられたドアが、怖くて開けられない。

うう、無理だよなんだよ営業って。営業事務って訳じゃないんだよね?

なんでこんなことに、いやでもせっかく手に入れた職を、今ここで無理ですなんて言っ
て、投げ出す訳にはいかないんだけれど。

心の中では悪態をついたけど、ぐだぐだ悩んでいても仕方ない。

上司を待たせる訳にもいかないと、思い切ってドアを開いた。

「……失礼します……」

え、と。

なにこの状況。なにこの華やかな雰囲気。

私、場違いじゃないですか! 本当に間違ってますせんか!

「——はい、なにか御用でしょうか?」

うるたえる私に気がついた女性が、声をかけてくれた。

「あ、あの、本日付で、こちらの営業第一部に配属されました麻生と申します。村松様はいらっしゃいますでしょうか？」

「ああ！ はい、少々お待ちください」

村松さんが来るまでの間、失礼にならない程度にフロアを見回すと、ほとんどが空席で残っている数人の女性社員も皆、あわただしく動き回っていた。

営業ってというのは、どこの会社でも花形だと思っていたけれど、この会社でもそんなんだろう。

しかもここは第一部と名がつくぐらいだから、さぞかし大口の取引先を抱えているんだろうと、今までの社会人経験からなんとなく推察する。

フロアには机が全部で二十個ほど並んでいる。

そのうちの数席は事務の方々が座っているから、残りは営業マンの席なんだろう。

見るからに花形部署として忙しそうな雰囲気冷たい汗が背中を落ちていった。

……私、ここでやっていけるんだろうか。

「やあ、待たせてすまないね。どうも、営業第一部部長の村松です。今日からよろしく、麻生さん」

彼は人好きのする笑みを浮かべて、こちらに歩み寄ってきた。

あまりの素敵さに思わずポーツとしてしまったけど、すぐに思い直す。

いや上司だよ、しつかりしろ私！

「よっよよろしくお願い致します！」

慌てて頭を下げた。どもりまくったせいで、瞬時に顔が熱くなる。

なんで、こう、私つてしまらないんだろうか……

「……っ……じゃあ、仕事の説明するから、あつちのミーティングルームへ行こうか。

麻生さんの仕事は、ちょっと特殊だから」

「……は？」

明らかに笑いを堪えているその人の言葉に、首を傾げた。

特殊って、どういう意味だろうか。

未経験だからってこと？ でも、それなら最初から営業部になんて配属しなければよかったんじゃないかと思ったが、これから説明してくれるというのだから、大人しくついて行こう。

そんなことを考えていると、こぢんまりしたミーティングルームに入るよう促された。そして部長は「じゃあ今、書類をもってくるから、そこに座ってて」と言い残し、部屋を出て行ってしまった。

それにしても、なんで私、営業部に配属されたんだろうか。

履歴書に営業経験があるなんて書いてないし、営業に役立つような資格もっていないじゃないのに。

頭の中は大混乱で、早く戻ってきて、説明してください村松部長！と切実に願った。ほどなく、村松部長は書類を手に、にこにこ部屋に戻ってきてゆつくりと椅子に腰を下ろした。

「よし、じゃあ先に労働契約書について説明しようかな。これが社内規則で、こっちが労働契約書。こっちが細かな雇用の条件についての説明書。あ、今日印鑑もってきてるよね？」

「あつ、は、はい、あります！」

机の上に並べられた書類を見つつ、慌てて印鑑ケースを取り出して部長の説明をふんふんと聞きながらサインをしていく。

この不況のご時世に賞与まで出してくれる会社に入れるなんて、恵まれてる。

このとき私は、条件のいい会社に再就職できたことで舞い上がっていたのだ。部長の説明は右から左へ抜けて行つた。もっとちゃんと聞いておけばよかつたと、私は後に悔やむことになる。

契約書の最後の箇所記入を終えて印鑑をしつかり押すと、部長が書類をファイルに

綴じた。

「じゃ、次は仕事の説明をしようか」

「あ、はい」

「麻生さんは総務部、もしくは経理部の志望だったね？　なんで営業部に配属されたか、心当たりは全くない？」

心当たりはないが、気にかかっていることはある。社長に突撃してすつころんだのに、なぜ採用されたのかということだ。もしかして社長は、あのことを根にもっていて、私になにかしらのいやがらせをしようと思つて、この会社に入れたのだろうか。

いやいや、一流企業の社長が、そんなことくらいで自分の会社に入れ、不慣れな部署に配属して困らせてやろうなんて、馬鹿げたことをするのはありえない。

それに、そんな人には見えなかつた。

「それが、その、わからないんです。営業職で役に立ちそうな資格ももってないですし……」

「そつかさつか。うん、まあそうだろうね。なんせ社長の気まぐれだし」

「……はい？」

なにかの書類を見ながら頷いた彼は、思わず声を上げた私に、ん？と顔を上げ、首を傾げた。

いや、ん？ じゃなくて。今、なにかものすごく、おかしなことをおっしゃいませんでしたか。

「……き、気まぐれ……？」

「うん、さう。この子は営業にいた方が伸びるし、後々役に立つから勉強させておいてって言われてさー。いや参っちゃうよね、まあ社長の勘は当たるから二つ返事で引き受けただけだね！ あっはっは！」

あっはっは、じゃなくて。勘で他人の将来決められても困る！ というセリフが、喉まで出かかったけれど、必死で堪えました。

だって、相手は上司ですもの、納得できない理由で配属されたとはいえ、入社すると決めたのは私。今さら辞退する気はない。

「で、これが正式な配属命令ね」

「……ありがとうございます……」

先ほどまで部長が見ていた書類を受け取り、文面に目を通した瞬間、再び思考が停止した。

なんで今日は、こんなに驚いてばかりなんだろうか。

「……あああああの、あの、こ、これは、本当ですか？ 冗談、とかではなく？」

「さうだよー。社長が決めたことだからね」

「え、いやいやいやいや、そんな、そんなまさか……！」

書類をもつ手がガクガクと震える。

その後、ニコニコと笑っている部長に、「嘘ですよね」と問いかけ、「いやいや本気みただよ」と返されるというやりとりを一体何度繰り返し――

ほんつと肩に手を置かれ、悟り切ったような顔をした部長から一言。

「ま、諦めて働いてね、麻生さん。契約書にも、自己都合で反故にした場合、解雇するって書いてあるし。君、もうサインしたし」

「なぜえええ！ 私には無理ですよ、なんで私が！」

「社長が君をお気に召したからじゃないかなあ」

能天気言うな！

机に突っ伏した私の手には、ぐしゃっと握りつぶされた配属命令書。

フリーター改め――

麻生楓、株式会社 MAPLE 営業第一部配属……

兼、代表取締役片倉籠之介付き世話係に任命されました。

どうして私が、そんな重大な役割を負わされるの!! いや、そもそも世話係ってな

に!!

「まじで意味がわからないんだけども!!」

「あ、そうそう、後で社長室に行つてね。時間は十三時って言つてたかな。社長から直々に説明があるみたいだから。午前中は営業部で仕事を教えるねー」

「……………」

お気楽なセリフを吐く部長に、まだ会つて数十分しか経っていないのに殺意が湧いた。

3 世話係

午前中は美人キャリアウーマン、永峯ながみねほのかさんから営業のなんたるかを丁寧に教えてもらった。ありがたいことに彼女が私の指導をしてくれるらしい。

やっぱりというか、当たり前というか、畑違いすぎて、最初はちんぷんかんぷんだつた。けれど、彼女のわかりやすい説明のおかげで少しだけでも、なんとなく営業職のことがわかってきたような気がする。

必死で業務をこなしつつ、ようやく訪れたお昼休みに、永峯さんがオススメだという会社の近くのカジュアルレストランに連れて行ってもらつた。

「でも大変ね、麻生さんも」

「へ?」

オムライスを口に運んでいると、なぜか哀れみの視線を向けられた。

「社長付きの世話係なんて、今まで聞いたことないもの。それも営業部と掛け持ちなんて」
「……………ですよね、やっぱり……………私もなんでこんな配属命令を出されたのか、全くわかりません」

「そりやそうよねえ。今までなんの関係もない仕事をしてたんでしよう?」

「はい……………。営業なんてやったことないですし、永峯さんによくしてもらえて心強いけど、やっぱり不安で……………そのうえ社長の世話係とか、絶対無理だと思えます」

思わず愚痴ぐちが口をついて出る。

「営業事務、とかだけならよかつたのにね」

心からそう思う。一般社員が、専任秘書でもないのに社長の世話係をするなんて聞いたことない。

「でもま、悩んでいても仕方ないか。そうそう、麻生さん気をつけてねー」

「え?」

「ほら、社長、顔がいいから女子社員に人気があるのよ。秘書室のお姉さま方にも例にも漏れず、ね。私は興味ないから全然気にしてないんだけど、もうすでに噂になってるから、麻生さんのこと。いい年した大人が、そんなことでやっかむのもどうかと思うけどねー。さすがに社会人になってまで嫌がらせするような社員がウチにいるとは思いたくないけど」

そう言つてにこやかに笑う永峯さんとは対照的に、私の顔色は真つ青だ。

女子特有の陰湿なイジメに遭うなんて思いたくないけれど、ないとはいえない。

人気ナンバーワンの社長の世話係つてのは、つまりはそういうリスクを背負うつてことなのだ、ようやく気がついた。

「私、本気で嫌なんですけど……こ、断れたりしないんですかね」

「断つたら解雇されちゃうんでしょ？ 新入社員に世話係をさせるなんて、確かにいかなものかと思うけど、嫌なら辞めるしかないんじゃないかしら。でもねえ、このご時世に、決まつたばつかりの職を投げ出すのは、勇気いるわよねえ」

「……うううう……」

「後は、そうね。午後イチで社長面談があるんでしょ？ そのときに直談判するくらいしか思いつかないわ、ごめんね」

苦笑混じりの言葉に、私はうなだれるしかない。確かにそのとおりで。せつかく決まっ

た仕事だもん、やめたくない。

なにを言われるのか想像するだけで怖いし、できれば社長には会いたくない。

そんな私の願いも虚しく、一時間のお昼休憩はあつと一時間に終了した。

目の前に立ちほだかる重厚なドアに、思わず唾を呑み込んだ。掲げられたプレートには間違いなく社長室と書かれている。

前の会社でも、一般社員にご縁のないこんな場所に足を踏み入れたことなどない。

営業部からものの二分とかならない場所にあつたけれど、明らかに雰囲気違っていて、面接のとき以上に緊張する。

ノックするのがためらわれるけど、社長との面談に遅刻するなんてありえない。意を決してドアを叩くと、すぐに中から「どうぞ」という声が聞こえた。

恐る恐るドアノブをひねり、ゆっくりと開く。一礼してから室内に足を踏み入れると、そこは想像とは違って、いたってシンプルな部屋だった。

「麻生さん？」

「っ、はい！」

ものめずらしい部屋に気を取られていたせいで、返事の声が思い切り裏返つてしまう。正面の椅子に座る男の人が、面白そうに笑いながら「座つて」と言つて、私を机の前

のソファに促した。

言われた通りに座り、口を開く。

「……あの」

「まあ、聞きたいことはいっぱいあると思うけど、まずは自己紹介してくれるかな？」
 につこりと微笑む彼は、あの日あの場所でぶつかつた人と本当に同一人物なんだろうか。

「……あ、えっと、本日付で営業第一部に配属されました、麻生楓と申します。今年で二十六になります。採用して頂き、誠にありがとうございます。一生懸命がんばります」
 終始ニコニコしたままの社長は「うん」と一言だけ言うと、背もたれに預けていた上半身を起こした。

「ありがとう。ただ、一つ抜けてるね」

「え？」

「俺の、世話係に任命されてなかった？」

その言葉に、うっと喉が詰まる。

実は、素知らぬフリしてこの場をやり過ごせば、いつか忘れてもらえて、なかったことのできるかもって思ってた。だけどそれを本人の前で言ってしまったら最後、後戻りできないじゃないか!!

「……されてました……」

「だよね。よかつた、伝わってなかつた訳じゃなくて」

頬杖をつきながら、につこり笑つた彼の表情になぜか悪寒が走る。

私、かっこいい人が苦手とか、そういうのを思ったことは今までなかつたのに。この人の笑顔だけは、なんだか怖い。

「……あの、世話係って、具体的にはなにをすればいいんでしょうか……?」

「——そうだね、夜のお相手、とか」

「……うえ?」

「だから、俺の夜の相手」

空耳だと思ってもいいですか、いいよね! だってそんなこと一般社員に強要する社長とかいる訳ない。いたとしても私みたいな平凡を絵に描いたような女子社員にそんな話が舞い込んでくる訳がない。

遠い目をしつつ考えていると、ぶつと噴き出す音が聞こえた。

「……ふっは……ははは! ごめん、冗談。まさか真面目に考え込まれるとは思わなかつた」

「す、すみません」

遠慮なく「ははは」と笑われて、一気に顔が熱くなる。

そりゃ普通の男友達に言われたら冗談だと思っけれど、ほとんど話したことのない相

手に、冗談なんて言われるはずないって考えるのは普通の反応だと思ふ。

「いや、大丈夫。聞いてたとおり面白いね、麻生さん」

「え？」

彼は毗まぶたにたまった涙を指で拭き取りながら言う。

泣くほど面白かったですか、そうですね。からかわれた私は、ちょっと居心地悪いんですけど。その気まずさを払うように、私は気になった言葉の意味をたずねた。

「……え、っと、あの、私のこと、ご存知だったんですか？」

「うん」

「あの、面接の選考のときのこととか、聞いてたんですか……？」

そこまで問いかけて、ふと思ふ。

いやでも面接で笑われるような珍回答はしていない。だから、「聞いてたとおり」なんて言えるほど、彼は私のことを知らないはず。じゃあ、それなら誰から？

「——片倉良太りょうた、この名前に聞き覚えは？」

「えっ……！」

「知ってるよね、花川企画はながわにいた麻生さんなら」

それは、今、一番聞きたくない名前だった。

どうしてこの人が知っているの。考えて、ふと思ひ出した。

確か、社長の苗字も片倉じゃなかっただろうか。

「俺の従兄弟なんだ」

「……い、いとこ……っ?!」

「そう、従兄弟。顔が似てないから、わかんないだろうけどね？」

従兄弟。

そうか、だからか。目をつけられた訳だ。

ってことは、ここに採用されたのもあいつのおかげってこと？

やだ、そんなの超反吐へどが出る。

大体、私が転職せざるを得なくなったのは、元はといえばあいつのせいで……！

「私っ」

「辞退は認めない。君はもう、労働契約書にサインしたんだよね。君は、俺の世話係だろ？ 契約書、もう一度読み返すといいよ。ああ、今は手元にないのかな。なら後で確認するといい」

「どうせ！ ろくでもないこと聞いたんでしよう！」

「ろくでもない、ね。俺はそうは思わなかったから、君を世話係に任命したんだけど」

「……？」

「じゃあ、採用を取り消す？ でも、君には金が必要なんじゃないの？」

「……くっそ、むかつく……！ 従兄弟揃って……！」
 「それはほめ言葉として受け取っておくね。どうする？ 俺の世話係する？ それとも辞退する？ でも辞退したら、おそらく君は苦しい生活に逆戻りになると思うけど」
 「——やるわよ！ やればいいんでしょ!! やれば!!」
 半ばややくそ気味に叫ぶと、目の前の男はにつこりと悪寒おかんの走る笑みを浮かべて、私に言い放った。

「そう、じゃあ、よろしくね。今日はもう無理だけど、明日はちよど土曜だし、帰ったら引越しの準備をしておいて。業者の手配はこちらでするから」

「は!? え、ちょっと! どういうこと!」

「世話係なんだから、同じ家で暮らすのは当然でしょ?」

……意味がわからないんですけど社長!!

4 強制引越し

「……」

翌朝、インターホンの音でたたき起こされた私を待ち受けていたのは、引越し業者の

お兄さん達の「おはようございます!」という元気な挨拶とまぶしい笑顔。寝起きのぼーっとした頭で「はあ」と答えると、彼らはさっそく作業を始める。

そこですぐやく、昨日のやり取りを思い出した……

彼らがああ胸糞悪い社長が手配した、引越し業者の人達だと気づいたときには、私が高年住んだ部屋はすっかり空からになっていた。

「では行きましょうか。片倉様から家主様も一緒にお連れするようにと言われていますので!」

「……はあ……」

ていうか、私まだ寝巻きなですけど。だがそれは彼らには関係ないらしい。

トラックの助手席に押し込まれた途端、トレーナーと短パンという今の自分の姿がやたら恥ずかしくなってくる。しかも足元はサンダル。

現実離れた状況に「もう、どうにでもなれ」と思い、窓の外に目をやると青い空が広がっていた。

やだ、なんていい天気。洗濯日和びよりじゃないの、洗濯機回さなきゃー。

——おい、私、現実逃避してる場合か。どうなるんだ、これから。

やっと就職先が見つかって、前途洋洋だったはずなのに。

それがどうしてこうなった。誰か、昨日のことは夢だと言ってください。

そんな思いも虚しく、私の一切の荷物を積み込んだトラックは、いかにも高級そうなマンションの前で停まった。

助手席から私を問答無用で降ろすと、彼らはてきぱきと荷物をどこかの部屋に運び始める。

「……マジすか……」

てっぺんが見えないほど高いマンションを、エントランス前で見上げた。

私の予想が正しければ、この高級そうなマンションの一室が、社長のご自宅なのだろう。大体、世話係つてなによ。一緒に住んでなんの世話すんのよ。

頭を抱えてその場でうずくまっていると、頭上から「ぷっ」と噴き出す音が聞こえた。

「——また、すごい格好してるね、麻生さん」

「しゃちよ……!」

くすくす笑われて、慌てて立ち上がった。

うう、絶対に今の私、顔が赤くなってる。

気の抜けた服装を見られて恥ずかしいけれど、それも仕方ないことだろう。だって時間も知らされずに突然引越し業者がやって来て、呆然としている間に荷物を全部梱包されて連れて来られたのだから。

「……これ、職権濫用なんじゃないんですか」

「少し違うね。これは契約事項に含まれてることだから」

平然と言いつ返し、ぐつと言葉に詰まる。

確かにそうなのだ。

昨日家に帰ってから、労働契約書の控えを穴が開くほど見た。するとそこには「雇用の命令を拒む正当な理由がない限り、命令には従うこと」と書かれていた。……盲点だった。

なんで私、サインする前に、契約書をちゃんと読まなかったんだろう。

「……正当な理由があれば、拒否してもいいんですよね」

「世話係っていうのは文字通り身の回りの世話をすることだよ。同じ家に住んだ方が都合がいいと思わない?」

「……っ……」

なんで私がそんなことしなくちゃいけないんだ!

そう思ったところで口にはできず、ぐつとこぶしを握りしめた。

「いつまでもそんな格好で外にいたら風邪引くね。ついておいでよ、部屋まで案内するから」

マンションに入っていく彼の背中を見つめながら、仕方なくのろのろと歩き始めた。

うう、あの背中を蹴り飛ばして「誰が従うかばーか!」って言えたら、どんなにすつ

きりするだろうか。

「だけど、職は失うのはいやだ。」

潔く退職を選べない自分も悪いと思うけれど、でもなんで私、こんなについてないの。悲劇のヒロインを気取るつもりは全くないけれど、この仕打ちはなんですか。私、これでも真面目に生きてきたと思うんですけど、神様。

エレベーターの前で思わずため息を零し、がっくりと肩を落とすと、頭の上にはんと手が置かれた。

見上げれば、社長がやわらかい眼差しでこちらを見下ろしている。

「——そう、肩を落とすことでもないんじゃない？」

「は？」

「少なくとも、俺は君に不利益になるようなことはしないって約束するよ」

「……もう十分、不利益をこうむってる気がするんですけど……」

「まあそれは、おいおい教えてあげます。だけど今はだめかなー」

「はあ？」

「しばらくはおとなしく、世話をやつてることだね」

「……本当、意味がわかんないんですけど」

「要は俺のおもちゃになっとけば、得するよって言ってるんだよ。まあ、得があるよと

なからうと拒否権はないけどね」

「……」

「ほら、早く乗って」

エレベーターに乗り込み、手招きをする男に軽い殺意を覚えた。やっぱり私、選択を間違っていないだろうか。

いや、それならもう、とうの昔に間違えてる。『アノ時』、『アノ選択』をしてなかったら、おそらく今、私はこんな状況に置かれてない。

再びため息をついて、私もエレベーターに乗った。

「……っ……!!」

「そこが今日から君の部屋ね。一応契約終了になったときに元の生活に戻れるよう、君の家具とかは全部そこに置かせたから」

家に入るなり、私は一室の前に案内された。

そして彼の手によって開かれたドアの向こうには、今まで住んでいた私のワンルームが再現されていた。

ただ一つ違うのは、この空間が彼の自宅の一部屋だということだ。

この家いくつ部屋あんよ、どれだけ広いのよ、こんなマンションに一人暮らしって

やつぱりセレブは違うのね……ってそうじゃない！

「……あの」

「ああ、着替えたらリビングに来てね。仕事の説明をするから」

「あ、はい……」

そう言っただけで遠ざかる背中を呆然と見つめた後、再び視線を室内に戻し、足を踏み入れる。

たんすの自身は移動した形跡がない。恐らく自身が入ったまま運んだんだろう。

備えつけのクローゼットを開けると、その広いスペースに見合わない私のコート類がかかっけていて、なんだかちょっと居心地が悪くなる。

とりあえず、部屋着としてはちょっときれいな服に着替えてリビングに向かった。

「……すみません、お待たせしました」

「ああ、うん。そこに座ってて」

声のした方を振り返ると、彼はオープンキッチンでなにか作業をしているようだった。とりあえず、おとなしくソファに座る。なんて座り心地がいいんだ。

すりすりソファの表面をなでていると、目の前のテーブルにカップが置かれた。見上げた私の目に不思議そうな顔をした彼が映る。

「……なにやってるの？」

「えっ！ いっ、いや手触りいいなって思いました!!」

「ああ……。まあいいや、仕事の話をしても？」

「あ、はい」

私が頷くと、彼は一人掛け用のソファに腰を下ろして、カップに口をつけた。顔もかっこいいし、上品な雰囲気だし、おしゃれなインテリアにも似合っていて、様になるといふかなんといううか。

「麻生さんには、基本的にこの家の家事全般をやってもらう。洗濯とか掃除とか、あとは食事の用意とか」

「……家政婦、みたいなことですか？」

「そう。あ、家事はできるよね？」

「それは、問題ないですけど……」

「基本的には営業の仕事を優先にして。本業はそっちだから」

「……はあ……」

「後は、俺が出席する会食とか、パーティーとかで、同伴が必要な場合も君に出てもらうから」

「はあ!？」

「ちようど欲しかったんだよね。私情を挟まないで頼める人」

「えっ、いやいやあの！ 私、庶民なのでそんな場に出られないです！ ドレスとかもつてないし！」

「それはこつちで用意するよ。もちろん経費だから、麻生さんの負担にはならないよ」

「でも……………」

「いい加減、玉の輿狙いだってわかってる女に声をかけるのも、面倒なんだよね」

「……………」

「これも世話係の仕事。よろしくね」

よろしくねって、荷が重すぎてよろしくされたくないと瞬時に思った。

家政婦の真似事だけなら、まあなんとかってホツとしていただけに、肩にかかるプレッシャーがはんばない。

パーティーってなんだ。そんなの出たことないし、礼儀作法なんか全くわからない。

「それほど気負う必要ないよ。頻繁にある訳でもないし。とりあえずは、そうだな、今日の昼ごはんの用意から頼むね。俺はちよつと書斎で仕事してくるから。ああそうだ、基本的にこの家のものはなんでも使っていいよ。ただ、俺の書斎にだけは入らないでね。会社の極秘資料とかあるから」

「……………わかりました……………」

それから彼は、どこにどんな部屋があるかを説明し、私はそれをやる気なく聞いていた。彼は全て伝え終えると、ソファから立ち上がって言う。

「じゃあ、あとはよろしく」

歩き出し、ドアに向かう彼に、思わず声をかけた。

「……………あの……………良太から、どんなこと聞いたんですか」

彼の従兄弟で、私が失業する原因を作った男のこと。

それは怖い問いかけだったけど、どうしても聞かずにはいられなかった。

あいつが私をどんな女だと思ってるかなんて興味ないけど、これから働く会社の社長に悪いように言っているのだとしたら、それは訂正したいと思ったのだ。

「——秘密」

「え」

「教えてあげない」

「?」

「なんで君みたいなのが、良太に目をつけられたのかな。君って、ああいう男が来て、はねのけちゃいそうなのに」

「……………はねのけるって……………」

それができなかったのは、ひとえに、自分の弱さのせいだ。あのときのことを思い出すと、苦々しい気持ちになる。

「もういいかな？ わからないことがあったら聞いて。じゃあ、よろしくね」
 そう言い残して、彼は去って行った。

わからないことがあったらって、私はあなたがなんでこんなことするのか、一番わかんないんですけど。

ふうとため息をついて、やけに高い天井を仰ぎ見る。それから私は、気を取り直して昼ごはんの支度をすることにした。

5 生活基盤

冷蔵庫の中を見たら、卵とキャベツとビールしか入っていないかった。

かろうじてお米は発見したけれど、炊飯器が埃をかぶっていた。

これでなにを作れと言うのだろう。プロの料理人でも頭を抱えるだろう。

お昼まで時間もないことだし、スーパーの場所は後で教えてもらうとして今日はこれでチャーハンでも作ろう。

セレブのお口に合うかどうかはわからないけれど、食材を用意してないのがいけないんだ。

そう開き直り、まずは炊飯器を洗って次にご飯を炊く。

なんとか塩コシヨウは見つけたけれど、おしょうゆはどこだ。

使い慣れないキッチンで四苦八苦しながら、どうにか作り終えた具の少ないチャーハンを見つめ、運び込んだ自分の冷蔵庫の中身を使ったらよかったんじゃ、と気がついた。そんなことにも頭が回らないなんて。自覚はあったけれど、ここまで動揺してるとは。でももう出来上がったし、これでいいやと、書斎のドアをノックして声をかけた。

「……社長、お食事できましたケド」

棒読みなのは仕方ない。別に好きでやっている訳じゃない。

返事がなかったから、もう一度ノックしようとする、ふいにドアが開いて思わず肩が跳ねた。

「あ、ごめんね」

「いつ、いえっ……！」

危うく彼の胸板にぶつかりそうになり、慌てて後ずさる。そして鼓動が速くなった心臓を抑えるように胸に手を置いた。

けれど当の本人はなんら気にした様子もないまま歩いていき、ダイニングテーブルの椅子に腰を下ろす。

なんで私だけこんなに動揺してるんだ。

洗い物をしようとキッチンに戻ると、カウンターの向こう側で彼が驚いた顔をしていた。

「……すごいね」

「なにがですか？ 手抜きすぎてすごいですか？」

「違う違う。よく食事を作れたね。材料、なんにもなかったのに」

わかったなら言えよ、このやろう!!

口に出すのは、すんでのと^こで堪えたけれど、顔には思いつきり出てしまった。

さぞかし眉間に皺が寄っていることだろう。鏡を見なくてもわかる。

彼はなにを思ったのか、ふっと笑うと、頬杖をつけてこちらを見つめてきた。

「……な、なんですか」

「いや？ 素直だなーって思ってた」

「は？」

「後でスーパ―に連れて行くよ。確か近くにあったと思う。ああ、それと食費は渡しておくから、そこから出してね。領収書ももらってきて、俺の名前で」

「え、あ、はい」

彼はスプーンを手にし、思いつきり手抜きのチャーハンを食べ始めた。私が洗い物を終えると、ちょうど彼も食べ終わったようので、食器をカウンター越しに差し出してきた。

「「ごちそうさま」

「……お粗末様です」

「おいしかったよ、料理うまいんだね」

「……いや、でもすごい手抜きですけど……」

「簡単な料理ほど、その人の実力が出ると思うよ」

「はあ……」

頭をなでられて、なんだか調子が狂う。なにがしたいんだろう、この人。彼はおエライ立場の人。そんな人が、なんで平凡な私なんかに目をつけたんだろう。

そういうえば、私まだこの人の年齢も知らない。

「……あの、社長っていくつなんですか？」

「社内報に書いてなかったっけ？ 今年で三十八だよ」

「えっ!？」

どんなマジック使ってるんですか、その年齢不詳の顔!!

「よく驚かれるんだけど、そんなに見えなかな」

「み、見えません、いいとこ三十代手前くらい……」

「へえ、そんなに若く見えるんだ」

「……少なくとも、私はそう思いましたけど……」

「ふーん。麻生さんは二十六だっけ。いいね、若くて羨ましい」

その表情からはなんの悪意も感じなかったから、多分本音なんだろう。受け取った食器をシンクに下ろし、ついでに洗ってしまおうと水を出した。

彼はまた仕事に戻るようで、私に背を向けて歩き出したけれど、すぐに「あ」と声を発して、振り返った。

「そうだ、お墓参りに行きたかったらちゃんと行ってね」

「え……」

「それくらいの休みはあげるからさ。ああ、それと夕飯の買い出しに行くときも声かけて」

「……はい」

さらっと言われて視線のやり場に困り、自分の手元を見下ろした。

本当に、どこまで知ってるんだろう。私が月命日に、いつも両親のお墓参りに行ってすることは、誰にも言っただけじゃなかったはずだった。

「……」

「朝から疲れてるわねー、麻生さん。大丈夫？」

「大丈夫ではないです……」

月曜日、会社のデスクでぐったりとしている私に、永峯さんが苦笑を漏らす。

だがしかし、私にとっては笑い事では済まされない。なんだこの針のむしろ。

朝、世話係なんだからと鞆持ちを命じられ、同じ車でムリヤリ送迎された。

だけど、うっかり素直に頷いたのが間違이었다と気づいたのは、会社に着いてからだった。

出迎えてくれた秘書のお姉さまの目つきの怖いこと。

違うんです、よろしければ代わってください！ って何度口にしそうになったことか。

そのうえ、このフロアにたどり着くまでに何人もの女子社員の方々に捕まった。

「どんな方法で社長に取り入ったのよ」とか言われても、私知りませんからああ怖い！

怖い。女子の集団怖い。そんなシンパまで作られているあの王子様が怖い。

そう、彼はまさに王子だ。社内の女性社員が社長を見つめる視線は、まるで獲物を狙うハンターのようなものだ。

ええとなんだっけ、とろけるような笑顔、腰にくる甘い声……とかなんとか。申し訳ないが全く理解できない。かっこいいのは認めるけれど。

「お疲れのところ悪いけど、今日もガンガン勉強会するわよー。麻生さんには来週から外回りに出てもらおうと思ってるから、そのつもりでいてね」

「えっ！ は、早くないですか。私、全然自信ないんですけど」

「大丈夫大丈夫。最初は私と一緒に回るんだし。要は慣れだから、少しでも早く現場に

出たほうがいいのよ」

永峯さんはあつげらかんと言うけれど、私にとつては恐ろしいことこの上ない宣告だ。「大丈夫だって。麻生さんは呑み込み早いし、自信もつて。じゃあ、始めましょうか」

「……はい……」

外回り怖い。お客様を怒らせてしまったらどうしよう。永峯さんの講義を必死で聞いている私宛に、内線電話がかかってきたのは、時計の針がちょうど十二時をさしたときだった。

「……なんの御用でしょうか……」

不満たらたら私の様子を見て、目の前に座るその人は爆笑している。

内線をかけてきたのは社長だった。彼は緊急のことだからと言って、永峯さんとの勉強会を私に切り上げさせ、社長室に呼びつけた。だから急いでここへ来たのに、社長はさしたる用事がある風でもなく、呑気なものだ。

なにがそんなに楽しいのか。あ、私の顔見て笑ってるの？ すみませんね、面白い顔で。じろつと睨みつけると、ようやく笑いが収まったのか、彼は椅子から立ち上がった。

「お昼へ一緒に行こうと思って呼んだんだよ。期待通りの反応をありがとう」
そこまで言って、またくくつと笑う。

イラッとした。全然急ぎの用なんかじゃないじゃない、ご飯くらい一人で食べればいいのに。

会社の周りにはランチでできる場所が少ないし、一緒に出かけて誰かに見つかったらどうする。なんの拷問ですか、私にこれ以上の針のむしろに座れと！

「ほら行くよ」

「ちよつ……！ はははは離してください!!」

「えー？ それは断る」

「なんで!!」

腰を抱き寄せられて、一気に血の気が引いた。

ちよつと、こんな体勢で廊下を歩く気ですか。マジで勘弁してください！

そんな私の気持ちなどお構いなしに、彼はやたら上機嫌でエレベーターに乗り込んだ。腕の中から必死で逃れようとあがいたけれど、逃げ出すことはおろか、身体の向きを変えらることすら叶わなかった。

奮闘虚しく、ポーンとエレベーターの到着音が鳴り響く。

開いたドアの向こう側がざわめき、そこがロビーであることを知る。彼はさっさと歩き出す。

せめて顔を隠そうと腕で顔を覆うと、なにを思ったのか彼はロビーのど真ん中で足を

止めた。

「……しゃ、社長……?」

「——仕方ないな、楓は」

「はあ!」

「今は休憩中だからわがまを聞いてあげるけど、就業時間中はダメだっていつも言ってるだろ?」

「いや、なに言っ……んっ!!」

神様。本当に、私がなにをしたっていうんですか。

無理やり合わされた唇。そして、きつく腰に回された腕。湧き起こった悲鳴に、私は悟った。

平穏な生活は、もう二度と戻ってこないのだと。

「……終わった……!」

「——なに言ってるの。まだまだこれからでしょう、麻生さん。期待してるよ、蹴散らしてくれるの」

耳元でそう囁かれて、思わず手が出そうになったけれど、ぐっと抱き寄せられたせいで不発に終わった。

もういい加減、殴っていいですかこのおっさん!!

* * *

定時を過ぎ、静まり返った社内では人があるのは、この社長室だけだった。

膨大な量の書類をまとめている最中、俺はふと彼女の顔を思い出して、思わず笑い声を漏らしてしまった。

「なに? いきなり笑い出して」

幼馴染という腐れ縁でボディーガードもしてくれている女性社員が、怪訝な顔をして俺の顔を見つめてくるけれど、そんなこと気にもならなかった。

あの驚いた顔が面白くて、可愛くて。

そんな表情が見たくて世話係にした訳ではないのだが、どうしてもからかいたくなる。昼休憩のとき、ロビーのど真ん中で俺が彼女にキスした後、ロビーは大騒ぎになったが、それは予測範囲内のこと。

もちろんあれは、俺に色目を使ってくる社内の女どもに見せつける為の荒技だった。けれど、まさか彼女から想定外の言葉が返ってくるとは思っていただけじゃなかった。

顔を真っ赤にさせて、言葉を詰まらせると思っていたのに、予想に反して顔を真っ青にし、あんなセリフを吐くとは。我慢できず、笑いが零れてしまった。

社長室にいるのは自分と幼馴染^{おきなななじみ}だけだ。もう笑いを堪^{こた}える必要もないだろう。

「……『終わった』って……くっくっ」

「……ちよつと王子、気持ち悪いんだけど」

「ああ、悪い。ちよつと、思い出しちゃって」

「……昼間のことですか。あんなことしたら、王子のファンになにされるかわかりませんよ、彼女」

「大丈夫だよ。そこはほら、お前がいるし」

「信頼してくださってるのはうれいすけどね。……事実を、彼女にお話する気はないんですか？」

その言葉を聞いて、笑いが引つ込む。確かに、彼女は全てを知る権利がある。

彼女は当事者だ。だがしかし、今はまだ。

自分の手元に引き寄せたのは、色々考えた上でのことだ。

一緒に暮らすことにしたのも、彼女の為だが、今その理由を彼女に打ち明ける気はさらさない。

知らない方がいいこともある。これは彼女が知らなくていいことだ。

環境の変化に戸惑いはあるだろうが、現状、彼女が仕事を辞めたいと言ってくることはないだろう。後は、俺次第だ。

「………必要ないだろ、今は」

「………傷つける為に呼び寄せた訳じゃないなら、あんまり遊ぶのはよしたほうがいいんじゃないの」

呆れたため息をついた幼馴染は、俺の性格をよく理解してる。言っても無駄だと悟ったのか、言うだけ言って社長室から出て行った。

一人になった部屋で、俺はふたたび彼女とのやりとりを思い出す。

一緒に暮らしてもらう、そう告げたときの呆気にとられた彼女の顔が浮かび、自然と笑みが零れた。

持つて生まれた容姿のせいとか、女性から嫌悪感を示されたことなどない自分を、ああもあからさまに拒絶する娘がいるなんて。確かにいきなり一緒に暮らせと言われて、受け入れられないのは当然だろうけれど。

少々強引なやり方だが、俺は彼女を守りたい。その思いは、一緒に暮らすようになって、ますます強くなった。彼女の人柄にも興味を引かれるようになっていたからだ。

とにかく、自分が近づいた目的も、これから起こるであろうことも、今の段階で彼女が知っておく必要はない。

彼女とその周囲の人間の身の安全を考えれば、これが最良の策だ。

「これ以上傷つける気は、さらさらないけどね」

俺は、目的の為なら手段を選ばない。手は打ってあるし、これからどう転ぼうとも算段はついている。詰めを見誤らなければ、全てうまくいく。

それにしても彼女との会話は思いのほか楽しくて、今回の計画の中でこんな楽しい思いができるとは思わなかった。

これからしばらく、同じ空間で暮らすことを考えると笑みが零れる。

このことは、想定していなかった事態だが、目的を達成する妨げにはならないだろう。こんな風に俺に目をつけられた彼女が少しだけ気の毒な気もするが、そこは諦めてもらうしかないかな、と自分勝手な結論を出した。

「……」

窓の外を眺めて、小さく息を吐く。

——彼女の唇は、とても甘かったな。

キスなんて初めての訳でもないのに、その感触がやけに生々しく残っていて不思議だった。

6 優しい顔をした悪魔

晴れ渡る空さえ憎たらしい昼下がり。私は永峯さんと一緒に、初めての外回りに出かけようとしていた。いよいよ会社の外まで来てしまい、緊張で顔が強張る。

「……」

「やだわー、そんな暗い顔してたらまとまる契約もまとまんないわよ！ 営業に大切なのは!？」

「っ！ 笑顔と元気です！」

「よろしい！」

思い切り叩かれた背中が痛い。

思いつきりはああんって、ばああんっていった。これ絶対、背中に手の跡がついてる。ひりひりする背中をさすりたい気持ちをつくつと堪え、社用車に乗り込んでシートベルトを締めた。

もう、覚悟を決めるしかない。それに、考えようによっては、針のむしろ状態の社内にいるより、王子様に一切興味のない永峯さんと二人で外回りに行く方が、今の自分に

とつては都合がいい。

「じゃ、行こうか」

「はいっ」

永峯さんに明るく声を掛けられ、元氣よく返事をする。

今はなにも考えず、仕事を覚えることに専念しよう。

そう、あの事件のことは、一旦置いておこう。

セクハラオヤジのことなんて、もうどうでもいいや。

現に、あのやろう、あんなことをしておきながら、あれから一週間、私とは一度も顔を合わせていないのだから。

永峯さんのサポートにより、なんとか初任務を終えて帰路につく。

マンションに着き、玄関の明かりをつける。

案の定、まだ主は帰って来ていないようだ。

あの行動の真意は今日も聞けそうにない、か。

仕事中は、外に出ていることもあり、彼のことを考えずに済んだ。けれど家に帰れば、毎日あのことを思い出さずにはいられない。

ため息をつきつつ、部屋で私服に着替える。それからキッチンに向かい、昨晩下ごし

らえを済ませておいた夕食の材料を冷蔵庫から取り出して調理を始めた。

これも仕事だし、毎日食事は作っている。それに、顔を合わせていないこの一週間も、ダイニングテーブルの上に料理を置いておくと、朝には食器が空になっっている。一応帰ってきてるんだろう。

残さず食べてくれるのだから、ありがたいといえはありがたいけれど、でも私は今、彼と食事がしなかった。——それは、なんであんなことをしたのかを聞きたいという意味で。

その機会が与えられず、私はちょっともやもやしている。

「っていうかさー……なによ蹴散らせって、意味わかんない……」

「——そのまんまの意味なんだけど。あれ？ 社内のお姉さま方にまだ、呼び出されたり、『とつとと別れなさいよ』みたいな言いがかりはつけられてないの？」

「……うああああ!!」

おかずを皿に盛りつけていると、突然、背後からそれをつまみながら声をかけられた。危うく、できたばかりのおかずを放り投げそうになる。

「なにもそんなに驚かなくても。俺の家なんだから、帰ってきてもおかしくありませんよ」

「ちちちが……たつ、たさいまとかさういう声をかけてくださいよ!!」

「ああ、そっか。たさいま」

「遅い!!」

彼はネクタイを緩めつつ、自室に入っただけで、
なんで今日はこんなに早いんだろうか。

聞きたいことがたくさんあったはずなのに、驚かされたせいで全部頭からぶっ飛んでしまった。

「ねえ、それおいしいね。早く食べたい」

リビングに戻ってくるなり、飄々ひょうたつとそんなことを言う彼に、ちよつとイライラする。ただ、家庭料理が珍しいだけのくせに。

同居生活初日の夜、私が作った夕飯を前にして、彼は目をまん丸にして驚いていた。メニューは、家庭料理では定番の肉じゃがだったのだけれど、彼は口に入れると、いつも食べてるのと違うとか、ほざきやがった。

そりゃ、社長様がいつも高級料亭とかで口にしてるものとは違うでしょうよ。

一般家庭の味なんてこんなもんだと言うと、きらきらとした瞳を向けられて、ちよつと戸惑った。

次の日に作った料理も同じように瞳をきらきらさせて食べていた。

そんなことを思いながら、席についた彼の前に「ご飯と味噌汁を置いてキッチンに戻ると、彼は不思議そうな顔でこちらを見ている。

「……なんですか」

「いつも思ってたんだけど、なんで一緒に食べないの？」

「は？ あ、いや、だって一応社長は私の雇い主ですし、一緒に食べるのは失礼かと思っただけ」

「ああ、別にそんな気にしなくていいよ。ごはんって、誰かと食べたほうがおいしいじゃん。片付けは後でいいから、こっち来て一緒に食べなよ」

「いや、でも……」

「麻生さん、雇い主の命令には従うって契約、忘れた？」

「にっこりと微笑まれ、全身に鳥肌が立つ」

本能で逆らっちゃいけないと悟り、すぐに自分の分をよそって彼の前の席に座った。

「じゃあ、いただきます」

「……いただきます……」

こうして向かい合って、ご飯を食べるのは初めてだ。

数日前、ロビーで唇を強奪された後、私は一人会社の外へ逃げ出した。

あの後、彼がどうしたのかは知らない。けれど、休憩時間終了間際に戻ってきた私の顔を見るなり、目を充血させて睨にらみつけてきた女子社員達の様子から察するに、あるこ

とないこと言ったんだろう。

「……あの、さっきの続きなんですけど」

「うん？ ああ蹴散らしてってあれ？」

「はい。あれ、どういう意味ですか？ 社長はいつたい私になにをさせようとしているんですか？」

こっちは真面目に話しているのに、彼はにこにここと笑顔を崩さずにご飯を食べ続けている。味噌汁を一口飲んでから、ようやく口を開いた。

「前に言ったよね？ 玉の輿狙いの女が面倒だって。覚えてる？」

そういえば、最初にお世話係任命の理由を説明されたとき、そんなことを言っていた気がする。

金持ちは金持ちで、大変なんだなあなんてのんきなことを考えてしまった。

「そこで、だ。俺にお手つきの女がいたら、そういう連中もいなくなると思ってます」

「は？」

「もちろん、そいつらを黙らせられる人間じゃないと困る。だから、君を選んだ」

「いやあの、全く意味がわかんないんですけど……？ なんで私？」

頭の中はハテナマークで埋め尽くされている。

それなら、私じゃ容姿という点で役不足な気がするんだけれど。

「良太から話を聞いてたときは、ただ単に面白い子だなとか思わなかったけど、会ってみたらちよつと違った。それでひらめいたんだ。あの良太をぶん殴れるぐらいの女の子なら、自意識過剰の勘違いどもも黙らせられるんじゃないかなーってさ」

「……」

思わず、あほかと、口から出そうになって、口を嚙んだ。いくら私でも、女性を殴りはしない。男と女じゃ、そういうときの対処の仕方が違う。

大体、女は殴ったところで黙りはしない。いつまでも根にもって、知能戦で反撃してくる。女のほうが粘着質で扱いが面倒くさいのだ。第一、嫉妬に駆られる女の人なんて、女の中で最も扱いにくいものだというのに。

「後は、そうだな。ただ単純に面白いしね、麻生さん」

「……めっちゃくちゃ不本意なんですけど！」

「まあまあそう言わず、さ。楽しませてよ、俺のこと」

「なんで私が！」

箸を握りしめた手でどんとテーブルを叩いてみても、彼はやっぱりにこにここと笑ったまま。

「世話係でしょ。これも仕事だって」

「ふざけんなつづの！　なんで好きでもなんでもない男の為に、そこまで身を削らなきゃなんないんですか！」

「ああ、そっか、それもそうだね」

「今さら!？」

彼はさも今気がついたみたいに呟いた。そして、なにかをひらめいたように笑みを浮かべる。

「——なら、好きになればいいよ、俺を」

死ね、色ボケオヤジと言わなかった私を褒めて頂きたい。

私が怒りで言葉を失っているのに気づいているくせに、彼はまだ続ける。

「でも、そうだね。急に言っても納得してくれないだろうし、君が俺を好きになりたくなる条件をつけようか。……君が大事にしているあの家族を、俺が全て面倒見ようか、主に金銭面で。君が女どもをうまく蹴散らしてくれたら、そのお金は返さなくてかまわない。どう?」

「……っ……!!」

……どうしてこの人、良太のことのみならず、私の家族のことまで知ってるの——? 見当もつかないけれど、人の弱みにつけ込んで卑怯だ——そう言っただけなのに、反撃の言葉が出てこない。

生家と、そこに暮らすきょうだいの顔が頭をよぎる——

目の前で優しく笑うその男が、悪魔に見えた。

7 悪魔の誘惑

私の両親がそろって亡くなったのは、高校三年生のときだった。

それまではお金に苦労することもなく、私は四人きょうだいの二番目として育った。すでに大学にも合格していて、残りの高校生活を満喫しようなんて、能天気遊びに出かけていたある日、姉から電話がかかってきた。彼女は、今すぐ病院まで来いと言う。そのときの記憶はおぼろげにしか残っていない。あまりにも、それまでの平和で幸せな生活とはかけ離れたものだったから。

病院に着いた私は、ある一室に通され、そこで両親と数時間ぶりに再会した。二人はまるで眠っているようにしか見えなくて、何事もなかったかのようにまた目覚めてくれるんじゃないかって、ほんやり考えていた気がする。

警察の人いわく、酔っ払い運転の車に突っ込まれて、二人ともほぼ即死だったらしい。それから、周囲の大人に促されるままに葬儀や納骨を済ませて、やっと周りが落ち着